

Subject：ゴリラの世界的権威、京都大学次期学長に

以前のドヤツでも何度か紹介しました、霊長類研究の世界的権威、京都大学の山極教授が京都大学の次期総長に選ばれました。若手研究者の圧倒的な支持と尊敬を受けて当選されたそうです。新しい新刊を発行されましたので、ぜひ皆さんに読んでいただきたいと思います。合わせて毎日新聞の【時代の風】に新しいコラムが掲載されていました。長年のゴリラ研究の現場から発した【警世の書】。必読だと思います。

◆「サル化」する人間社会

集英社インターナショナル刊 山極寿一著 1,188円

歴史に学べと申します。人間は幾千年も同じ事を繰り返し、如何に文明が発達しようとも生物として本来もっている行動論理はなかなか変わらないからです。それと同じように自然、特に祖先（進化の過程）から学べということも言えるでしょう。進化の過程で猿人→原人→ホモサピエンスと進化してきた我々は、自然界とのつながりや生物としてDNAに刻み込まれた性分から逃げる事ができないからです。霊長類学者として世界の尊敬を受ける山極教授の人間観、開眼の思いがします。

2014年(平成26年)8月13日 水曜日

京都大学の次期総長に選ばれた

ひと

やまぎわ じゅいち
山極 寿一 さん(62)



野外調査で日焼けした顔に、白髪交じりのあごひげが伸びる。10月から京都大学の第26代総長に就任することが決まった7月、「ゴリラのように泰然自若としていた」と抱負を語った。

霊長類研究の第一人者だ。30年以上、アフリカでゴリラの生態を調べ、人類との共通点などを探ってきた。家族のなりたちや、社会

性の起源について、柔らかな語り口で説く著書は一般読者も多い。山極教授に投票しないで――。

総長選びの参考となる教職員投票の最中には、キャンパスに一怪文書が張り出された。恩師が研究から離れてしまうことを危惧した学生たちのヒラは、人気の裏返し。結果は最多得票だった。

ノーベル賞の湯川秀樹に憧れて物理学を学ぼうと京大に進んだ。だが、霊長類学を知り、魅力にはまった。「いい先生、いい先輩に巡り合えたからこそ」。大学が、学生の夢や志望に大きく影響を与えられる場でありたいと願う。

少子化や国際化など課題解決のため、大学トップの権限強化を図る議論が盛んな中、むしろ「自由の学風」を大切にしたいという。「暴走しないよう歯止めが必要」と、自らを教員らがリコールできる制度を検討する考えだ。

個性豊かな教員や学生らがそろそろ3万人の組織をどう束ねるか。「私も猛獣として生きてきた。これからは猛獣使いになります」

文喜真 佐藤剛志

時代の風:サル化する人間社会＝京都大教授・山極寿一

毎日新聞 2014年08月03日 東京朝刊

◇低下する共感や連帯――山極寿一（やまぎわ・じゅいち）

人間以外の動物にとって、生きることは食べることである。しかし、それを実現するには、いつ、どこで、何を、誰と、どうやって食べるか、という五つの課題を乗り越えねばならない。現代の科学技術と流通革命は、その多くを個人の自由になるように解決してきた。24時間営業のコンビニエンスストアや自動販売機。車や飛行機などの輸送手段や、インターネットを通じた通信手段。電子レンジやファストフードなどの調理や保存などの技術。これらは私たちに、いつでも、どこでも、どんなものでも、好きなように食べることを可能にした。

しかし、技術によっては変えられない課題もある。それは、誰と食べるか、ということだ。もちろん、移動手段の革新によって、遠くに住む知人や親族に会うことができるようになった。だが、誰と食卓を囲むかは、昔も今も個人の自由裁量によっては決められない。

古来、人間の食事は栄養の補給以外に、他者との関係の維持や調整という機能が付与されてきた。いやむしろ、いい関係を作るために食事の場や調度、食器、メニュー、調理法、服装からマナーにいたるまで、多様な技術が考案されてきたと言っても過言ではない。どの文化でも食事を社交の場として莫大（ばくだい）な時間と金を消費してきたのである。それは効率化とはむしろ逆行する特徴を持っている。

サルの食事は人間とは正反対である。群れで暮らすサルたちは、食べるときは分散して、なるべく仲間と顔を合わせないようにする。数や場所が限られている自然の食物を食べようとすると、どうしても仲間と鉢合わせしてけんかになる。だから、仲間がすでに占有している場所は避けて、別の場所で食物を探そうとするのだ。でも、あまり広く分散すると、肉食動物や猛禽（もうきん）類にねらわれて命を落とすおそれが生じる。仲間といれば外敵の発見効率が上がるし、自分がねらわれる確率が下がる。そこで、仲間と適度な距離を置いて食事をするようになる。

しかし、食物が限られていれば、仲間と出くわしてしまうことがある。そのときは、弱い方のサルが食物から手を引っ込め、強いサルに場所を譲る。サルたちは互いにどちらが強いか弱いかをよくわきまえていて、その序列に従って行動する。それに反するような行動をとると、周りのサルがよってたかってそれをとがめる。優劣の序列を守るように、勝者に味方するのである。強いサルは食物を独占し、他のサルにそれを分けることはない。サルの社会では、食物を囲んで仲良く食事をする光景は決して見られない。

けんかの種となるような食物を分け合い、仲良く向かい合って食べるなんて、サルから見たらとんでもない行為である。なぜこんなことに人間はわざわざ時間をかけるのだろうか。それは、相手とじっくり向かい合い、気持ちを信じ合わせながら信頼関係を築くためであると思う。相手と競合しそうな食物をあえて間に置き、けんかをせず平和な関係であることを前提にして、食べる行為を同調させることが大切なのだ。同じ物をいっしょに食べることによって、ともに生きようとする実感がわいてくる。それが信頼する気持ち、共に歩もうとする気持ちを生み出すのだと思う。

ところが、前述した近年の技術はこの人間的な食事の時間を短縮させ、個食を増加させて社会関係の構築を妨げているように見える。自分の好きなものを、好きな時間と場所で、好きなように食べるには、むしろ相手がいない方がいい。そう考える人が増えているのではないだろうか。

でも、それは私たちがこれまで食事によって育ててきた共感能力や連帯能力を低下させる。個人の利益だけを追求する気持ちが強まり、仲間と同調し、仲間のために何かしてあげたいという心が弱くなる。勝ち負けが気になり、勝ち組に乗ろうとする傾向が強まって、自分に都合のいい仲間を求めるようになる。つまり、現代の私たちはサルの社会に似た個人主義の閉鎖的な社会を作ろうとしているように見えるのだ。



＝梅田麻衣子撮影

昨年末に、和食がユネスコの無形文化遺産に登録された。今一度、日本文化の礎を見直し、和の食と心によって豊かな社会に至る道を模索すべきだと思う。=毎週日曜日に掲載

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.